

(発表題目)

形而上学的時間をめぐるトリロジー——九鬼周造・ベルクソン・ハイデガー
(氏名と所属)

企画者：岡田 悠汰 (東北大学/日本学術振興会)

司会：山口 尚 (京都大学)

提題者①：岡田 悠汰 (東北大学/日本学術振興会)

提題者②：濱田 明日郎 (在野研究者)

提題者③：藤貫 裕 (京都大学/人文学連携研究者)

(以下、要旨本文を千二百字以内で記入すること)

近年の「世界哲学」の潮流の中で、特に2010年代以降、世界的に日本哲学が注目を集めている。実際、2014年に設立されたInternational Association for Japanese Philosophy等の国際学会では、日本哲学に関する議論が活発になされている。そこでは、日本哲学の著作が次々と外国語訳されている状況も相まって、西田幾多郎や田辺元といった京都学派の中核的人物のみならず、三木清・西谷啓治・和辻哲郎・井筒俊彦など、多岐にわたる哲学者が論じられている。

2019年の関西哲学会でも「世界哲学」の動向を踏まえたワークショップが実施されたことは記憶に新しい。今回取り上げる九鬼周造もまた、こうした動向の中で国際的に研究や翻訳が進められている。しかし国内の九鬼の研究状況に目を移すと、研究会の不在に象徴されるように、組織的に活発な研究状況であるとは必ずしも言い難い。その結果、九鬼研究では、西洋哲学史研究と日本哲学史研究との間の対話的な議論に基づく、共同的な研鑽の蓄積がされてこなかった。しかし九鬼自身は、ヨーロッパの当時最新鋭の哲学を受容しながら、まさしく日本と西洋との対話を試みていたのではなかったか。

本ワークショップでは、この問題意識のもと、九鬼の哲学的意義を彼のハイデガーとベルクソン解釈から明らかにすることを試みたい。九鬼、ハイデガー、ベルクソンの三者が邂逅する場は時間論である。九鬼の「時間の問題——ベルクソンとハイデッガー」

(1929)を中心とした時間論を取り上げつつ、いまだ汲みつくされざる九鬼の哲学的意義を提示することで、日本国内での九鬼研究を活性化する一助としたい。

提題者①の岡田は、九鬼の時間論をハイデガー哲学の批判的受容という観点から検討する。特に、ハイデガーの水平的エクスタシスに対して九鬼が打ち出す垂直的エクスタシスの意義に着目し、九鬼が依拠する『存在と時間』以降のハイデガーの思索との可能的な「対話」を構想する。

提題者②の濱田は九鬼とベルクソンの関係を論じる。九鬼はベルクソンの「純粹持続」なる心理学的な時間概念に共感しつつ、あくまでそれを形而上学の俎上で処理する。哲学的スタンスの対照にもかかわらず、しかし「生」における時間の意義という点において、両者の時間論は表裏一体を成しているのではないか。

提題者③の藤貫は、九鬼のハイデガーとベルクソン読解を踏まえて彼の回帰的な形而上学的時間論の読み直しを試みる。具体的には、九鬼特有の回帰的時間が論じられた「時間の観念と東洋における時間の反復」(1928)と「形而上学的時間」(1931)との間に、各回帰の順序的区別という核心的論点に関する内容的差異を確認した上で、その差異の由来が、二つの著作の間に位置する「時間の問題」中の「普遍的時間」を巡るハイデガー・ベルクソン読解にあるという読み筋を提案する。